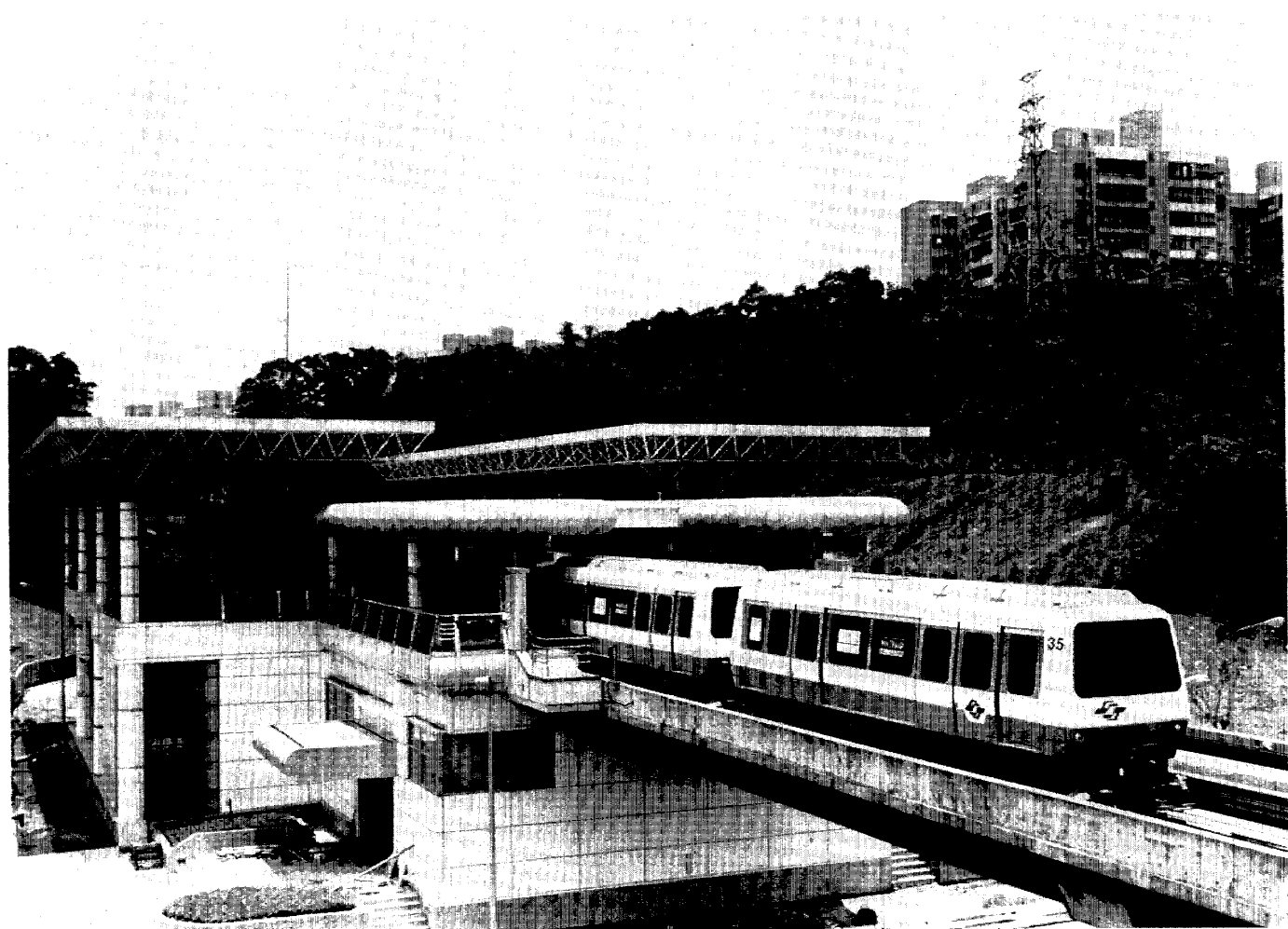


- 62p
- (5) 顏如蔚 1994 『李登輝的身世之謎』 臺灣禾馬文化 24p
- (6) 司馬遼太郎 1994 『台湾紀行』 朝日新聞社 493~494p
- (7) 前掲書 495p
- (8) 顏如蔚 1994 『李登輝的身世之謎』 臺灣禾馬文化 320~321p
- (9) 吳福成 1995. 2. 28 自立早報 9面
- (10) 司馬遼太郎 1994 『台湾紀行』 朝日新聞社 107p
- (11) 許漢 1993 『李登輝的七十年』 臺灣開今文化 50p
- (12) 前掲書 38~39p
- (13) 趙賢明 1994 『臺灣三巨人』 臺灣開今文化 26p
- (14) 陳振盛 1988 『李登輝的小故事』 台視文化公司出版 1pと3p
- (15) 南方朔 1995 臺灣版『九十年代』月刊三月號 57p

- (16) 趙賢明 1994 『台湾三巨人』 臺灣開今文化 50p
- (17) 司馬遼太郎 1994 『台湾紀行』 朝日新聞社 107p
- (18) 前掲書 95p
- (19) 前掲書 107p
- (20) 南方朔 1995 臺灣版「九十年代」月刊三月號 56p

参考文献

1. 鄭良偉 & H. J. オータ 1995 「台湾の言語」 『言語』 3月号 大修館
2. 黃宣範 1992 『語言、社會與群族意識——台灣語言社會學的研究』 台灣文鶴書局
3. 邱質璞 1994 『大陸和台灣詞語差別詞典』 台灣珠海出版有限公司
4. 多仁安代 1995 「日本語教育の歩んできた道」 『概説日本語教育(第九章)』 三修社



木柵線の新高速交通システムの試運転列車。 写真提供：台北駐日経済文化代表處。



高雄市の“世貿聯合國”ビル（50階建）。写真提供：台北駐日経済文化代表處。

国連への加盟意欲、経済の南向（進）政策、対日外交の開拓など、これまで蒋介石、蔣経国父子の時代と一味違ったやり方をする。

彼自身の日本文化体験から、台湾の文化を以前より自由奔放にさせたのである。テレビでは、日本語のテレビ番組例えば「おしん」、「武田信玄」、「志村大爆笑」など堂々とバイリンガルで放映させた。

最近、李登輝総統は「社区意識」を提唱している。この「社区意識」の源は明治以降の「町村意識」である。日本経済の「雁行理論」も彼に採用され、国際分業に活用されているようである^(注20)。李登輝総統の「経営大台湾」（大きな台湾を作ろう）というスローガンの背後には、日本が文化を輸出するのと同じように台湾文化を輸出しようとする意欲も窺える。

政治外交の面では、許水徳や林金莖など、日本語のできる台湾本島出身の外交官を駐日代表として任命した。このポストは蒋介石、蔣経国父子の時代には、日本語のできない外省出身の人物が占めていたのだが。

教育改革の例としては、今まで大学1年生の必須

科目であった英語を大学外国語に切り替えるなどである。更に中学校、高等学校でも日本語を含む諸外国語の学習も許された。大学入学試験の語学科目をもっと多様化されるようにと一連の改革が行われるのは文化の豊かな台湾、そして国際的な台湾を作るためである。

李総統の政治の改革には反対の声があるが、文化の改造については皆が温かく見守っているようである。政治の功罪を別として、21世紀に向けて台湾には、李総統のような豊富な文化体験と多様な語学の才能を持っている国家元首が必要であろう。

(注)

- (1) 許 漢 1993『李登輝の七十年』臺灣開今文化 26p
- (2) 松本一雄 1994『外国人眼中的李登輝』臺灣國際村文庫書店 41p
- (3) 司馬遼太郎 1994『台湾紀行』朝日新聞社 195～196p
- (4) 陳榴明 1995 臺灣版『九十年代』月刊三月號



1993年開催の台北国際宇宙航空技術博覧会。写真提供：台北駐日経済文化代表處。

たから、李登輝総統の日本語には懐旧の念を抱いているのであろう。司馬遼太郎はこう言う。

——李登輝さんとは、むろん初対面であった。

会う前から懐かしさをおぼえていたのは、一つには、この人も私も、旧日本陸軍の予備役士官教育の第十一期生だったことである。^(注18) ——

しかし、対応の上手な司馬遼太郎も李登輝総統の日本語の断層(40余年の空白期)を察したかのように、

「……ともかくも私は、李登輝さんの日本語の能力を借用して話をしている」^(注19)と述べている。

つまり、司馬遼太郎は李登輝総統の知らない日本語の表現を避けて李総統と対談するわけである。

以上若宮清の話とは一見違うと思われるが、両方とも正しいと思う。若宮清は東南アジア諸国の元首を比較の対象としたのであり、司馬遼太郎は日本の旧制高校生を比較の対象としたのであるから、当然違った見解が出てきて、決して矛盾ではないと思う。

司馬遼太郎は李登輝総統と同じ教育背景などの共通点を持っているために、李登輝総統の日本語に懐かしさを感じている。若宮清は一人の記者として、

日本人でない外国の元首の日本語に敬服の念を抱いていると考えられる。いずれにせよ、李総統は日本人の心に訴える日本語で日本と台湾との外交関係をより一層発展させたと言えよう。

五、結 論

前にも述べたように、李登輝総統は日本統治時代の台湾に生まれ、閩南語を母語とし、そして22歳まで日本の教育を受け、日本語を身に付け、国民政府が台湾に移ってから北京語を習う。それから、アメリカに留学して、英語も勉強した。

つまり、文化の面において、客家の文化、閩南の文化、日本の文化、中国大陸の文化、アメリカの文化など多様な文化を遍歴してきたわけである。

言葉の面において、閩南語、日本語、北京語、英語などが達者で、まるで語学の天才のようである。こういう豊かな文化体験と語学能力は当然一人の人間の視野を広くさせることができる。政治施策のよしあしは別として、李登輝総統の国際感覚は蒋介石総統や蔣経国総統より鋭いと思う。

服している。若宮清は東南アジア数ヶ国の国家元首にインタビューした経験を持っている。彼の話では日本語の造詣から言えば、李登輝の右に出る者はない。李登輝の話す日本語は“貴族の日本語”であって、他の国家元首は彼の足元に及ばないだけでなく、一般の日本人でもついていけない。

李登輝が日本の賓客を接見する場面がよく台湾のテレビニュースの画面に映る。台湾の人々は日本の賓客と日本語ですらすら話していて、真ん中の通訳の存在が忘れられていると感じさせられている。李登輝の言葉に対する自信はかなり印象的である。^(注13)

国家元首を取材した日本人記者がエチケットとして、李登輝総統の日本語の能力をほめたのも不自然ではない。小学校から大学まで完全な日本教育を受け、22歳まで日本人だった李登輝はある程度日本語の能力を身につけているに違いない。

彼の北京語の演説の中に、「一代建国」、「一個犠牲、二個靈魂、三個能力」^(注14)「孔固力(コンクリート concrete)」^(注15)などの日本式の表現が頻繁に出てくる。これは、李登輝の思想の深層は日本語で構築されている証明と言えよう。

しかし、戦後、50年間、日本語には大きな変化が起きている。英語など外国語の文法に影響されて、日本語の文法自身が徐々に変化している。外来語の氾濫もめまぐるしい。日本国内に生活しないと、戦前いくら日本語の蓄積があっても、急に現代日本語の環境に置かれると、慣れないことが想像できる。

李総統の夫人曾文恵女史も日本の教育を受け、家庭内で李総統と閩南語や日本語で話す。李登輝総統は仕事の後、家に帰り、浴衣に着替え、ソファーに座って、NHKの連続ドラマを鑑賞するという。^(注16)

しかし、夫人との間の日常会話は生活の話題に限られているので、知識的、学問的なものではないと考えられる。台湾では、NHKを受信できるようになったのもつい最近のことである。それに、テレビと対談するわけには行かないので、一方通行の形で日本語を受け入れる。

何しろ、李登輝と現代日本語の間にはかなり長い空白期があったはずである。少なくとも40年ぐらいの知的日本語から離れたと考えられる。司馬遼太郎の『台湾紀行』の記述にもこの点が裏付けられる



李総統 (写真提供・台北駐日経済文化代表處)

と思う。

『…私と話をしているあいだ、李登輝さんは、ときどき日本語の単語を度忘れした。「あれは、何というんだったかな。何さん」

と、そばにいる何既明さんに聞いた。そのつど無口な何さんは、目覚めたような顔をして、ぶつぶつと呟やいた。李登輝さんは手を拍つようなあかるさで、「あ、そうだった」と言い、話をつづけるといったぐあいであった。

………中 略………

たしかにこの人の日本語は、模範的である。

ただ、話しているうちに、敬語が面倒になってきたのか、それとも、私に親しみを覚えてくれたのか、旧制台北高校の学生ことばになった。……』^(注17)

以上の描写から見ると、李登輝総統の日本語は旧制高等学校の模範的なものであり、現代的な日本語ではないし、話しているとき、日本語の単語をときどき忘れて、決して、流暢な現代的な日本語ではないと考えられる。

司馬遼太郎は李登輝総統と共同の文化背景があっ

も、足踏みしたかもしれません。」李登輝さんの場合も、同じ苦勞をなめたはずである。

彼(註・李登輝)の台湾語、英語、日本語のいずれもが国語(北京語)より流暢……と前掲の本の巻末に、彭懷真という人が書いている。――

李登輝総統の語学の学習歴としては、閩南語、日本語、英語、国語(北京語)という順序である。中学校時代から、英語の学習が始まっている。しかし、英語は日本語の力よりずっと弱かったようである。

「李登輝のうまれつきの才能はあまりよくない。学校でも最も弱い科目は英文と計量経済であった。彼は同級性の郭婉容(元財政部長、経済建設委員会主任委員)と同じように日本語の参考書を使用して、英語の不足を補った」という。(注11)

アメリカに3年半ぐらい留学のために滞在したけれども、李登輝の英語の能力は日本語のレベルに達していないのは確かである。1951年、李登輝は「美中基金会」の奨学金をもらい、アメリカのアイオワ州立大学に留学し、農業経済を専攻した。1954年帰国した後、台湾省農林庁に就職し、公務員になったのである。

前にも触れたように、李登輝は一旦政府の役人を志す以上、「国語」の北京語の勉強に腐心しなければならなかった。終戦を迎え、国民政府が台湾に引越してきたとき、李登輝は彼にとって新しい言語である北京語の学習を始めた。

22歳の年で新しい言語を学習するのは遅ればせながらも、当時の環境から見れば止むを得ないことである。いずれにせよ、台湾農林庁に入った時、李登輝はある程度北京語を身につけていたはずである。

しかし、李登輝は「北京語より日本語が流暢で、客家語より閩南語が達者で、2度アメリカに留学して、合わせて3年半滞在したが英語がペラペラしゃべれない。

アメリカ元大統領フォードが台湾を訪れたとき、李登輝総統とゴルフの試合をやり、スタートから終わりまで、李登輝総統は英語で会話をした言葉が少なく、宋楚瑜の通訳に頼るしかない。

李登輝総統の通訳官である中央通社社長の洪健昭の話では、李総統が外国の賓客を接見するとき、英語で表現できなければ、閩南語を話す。突然、日本語を話すこともあるので、3種類の言葉ができる

ければ、李総統の通訳官を担当できないという。(注12)。

李登輝総統は国家元首になった後も日本人の賓客を接見するとき、自分の立場を忘れて、通訳官がいなくても、通訳を通さずに直接日本語で日本の賓客と対談する癖がある。

外交上この勇み足の言語行動は一国の言語としてタブーである。李登輝総統は日本語にかなり自信をもっていても、日本人の賓客と話するとき、相手の国の言葉なので、録音されたら外交上の問題になる恐れがある。しかし、通訳官を通じて話せば、問題になっても、通訳官が責任を取ることになる。

ちょうど、総理大臣がたとえ車の運転が上手でも、運転手に運転させて、自分が運転しないのが一般的であるのと同じである。万が一、事故を起こしても、総理大臣が責任を問われずに済むのと同じ原理である。

1994年9月9日の中時晩報の報道によると「李登輝総統は流暢な日本語で、40分にわたって、日本衆議院議員訪問団に中華民国の発展の経験と、台湾・大陸との関係を紹介した」という。

テレビでも、よく李総統と日本の賓客と対談する画面が紹介される。そのとき、李総統の日本語の声がよく聞ける。ベテランの外交家の目から見れば、これらの言語行動はかなり危険であり、勇み足である。

しかし、日本語の分かる外国の元首として、日本人の心を打つに違いない。日本人は英語のできる外国人に敬服するが、日本語のできる外国人に親近感をもっていると思われる。李総統はある意味において、外交の習慣を守らないけれども、成功した対日の外交官であると思う。

さて、李登輝総統は日本語の造詣が深いかどうかという問題に触れたい。

「中学時代、李登輝は数学と英語の成績はまあまあというところなので、漢文と日本文学にもっと力を入れた。彼は日本文学には『古事記』から江戸中期の本居宣長の『玉勝間』の随筆集などを徹底的に読みこなした。

日本語に力を入れたために、模擬テストの成績は良くて、いつも先生をびっくりさせた程である。今でも李登輝は自分の日本語の造詣にかなり自負している。

日本人記者の若宮清は李登輝の日本語の造詣に敬



1994年の国慶大会に参加した大群衆。写真提供・台北駐日経済文化代表處。

帰り、台湾大学農業経済学科に編入された。^(注8)

つまり、小学校から大学卒業まで（台湾大学の1年間を除いて）、李登輝の受けた教育は完全な日本教育だった。母語の閩南語は勿論、日本語にもかなり自信を持っているはずだ。

台湾大学の卒業論文は中国語で提出しなければならなかったので、李登輝は日本語で卒業論文を作成してから大陸から就学に来た方生という2年上の先輩に依頼して、中国語に訳してもらった後、学校に提出したそうである。^(注9)

終戦直後、多くの台湾出身のインテリの抱えた苦悩と同じように、李登輝も日本語の思考様式から中国語の思考様式に転換した苦悩の時期があったはずである。学校では、「あいうえお」の教育から「ㄅㄆㄇ」の教育に変わったことは、知識人にとって今昔の感があったに違いない。

台湾人作家鍾肇政先生ご自身の経験談によると、彼は日本統治時代、日本語でものを考え、日本語で作品を書いたが、終戦後、日本語でものを考え、中国語に訳して、創作活動を続けたそうだ。

公の場で「国語」の北京語の使用を強要される時

期が台湾にあった。特に政府の役人を志す台湾人は「国語」の北京語ができなければ、すべての門が閉ざされたのである。

司馬遼太郎は『台湾紀行』の中でこのことにも言及している。^(注10)

——戦後の台湾における言語事情には、北京語の導入ということがある。大陸から国家そのものが引越してきたために、本島人にとっても、北京語ができなければ、大学の講義も聴けず、就職もできなかった。

「大変でした」と、のちに新営で会う開業医の沈乃霖先生がいった。ついでながら、沈姓は新営地方の名族で、このひとは昭和初年の東京に留学し、学位を東大医学部でもらった。

家では、台湾語をつかうが、そとでは日本語である。戦後は日本語をすてて、北京語を習った。診療のときの会話も、学会の発表もすべて北京語になったのである。

「まだ三十代で研究心が旺盛な時期だったので、北京語の学習のためにずいぶん時間と精力をつかいました。ひょっとすると、台湾ぜんたいの学問



国慶大会で会場の群衆に手を振る李総統。1994年10月10日。写真提供：台北駐日経済文化代表處。

京語を「国語」と定めるのがおかしいと反発する独立派もいる。台湾の多数の住民が話してる閩南語を「台湾語」と称して、将来台湾の新しい「国語」として制定すべきだという声さえある。

いずれにせよ、「台湾語」と「中国語」の概念は政治の立場によって、解釈も違うと言えそうである。

李登輝総統の発言には国民党の政権を台湾化しようとすると同時に、多数の台湾の住民が話している閩南語を台湾の「国語」にしようとしている意図も窺える。

四、日本語が教育言語であった

李登輝が生まれた時は1923年(大正12年)であり、日清戦争に清朝が負け、日本が台湾を領有してからもう28年が過ぎている。この時、日本語の教育はかなり普及している。

1929年、李登輝は6歳で汐止公学校に入学し、1932年9歳の時南港公学校に転校し、3年生に編入され、1933年10歳の時、小基隆公学校(現在の台北県三芝国民小学校)に転校し、4年生に編入さ

れ、1934年11歳の時、淡水公学校を卒業した。小学校時代の李登輝は父親李金龍の転勤により、小学校は数回も転校した。

日本統治時代の初等教育においては、日本語を常用しない者を公学校、日本語を常用する者を小学校に収容している。

つまり、台湾現地人の学童が公学校に入学し、日本人の学校が小学校に入学するわけである。李登輝が公学校に入学したとき、日本植民地の台湾の教育はもうかなり普及している。1935年、彼は公学校を卒業した後、台北第二中学校の入学試験に落ち、止むを得ず、淡水公学校の高等科に2年間燻っていた。

1939年、李登輝は15歳の時、台北国民中学(現在の台北市泰北中学)に入学し、1939年淡水中学校(現在の台北県淡江中学)に転校し、2年生に編入され、4年生の時、学級を飛び越す試験に受かって、台北高等学校(現在台北市の国立台湾師範大学はその跡地)に進学した。

1943年20歳の李登輝は渡日して、京都帝国大学農業経済学科に入学し、1946年終戦直後、台湾に

(台湾には閩南語を話す人口の比例が高いため、台湾語と言えば閩南語を指す場合が多い。しかし、厳密に言えば台湾には原住民の言葉や客家語や北京語なども使用されているので閩南語を台湾語と見なすこと自体問題がある)の効果を次のように素直に認めている。(注6)

李(注・李は李登輝 以下同じ)

いまは郷土の教育が多くなってきました。台湾の歴史、台湾の地理、それから自分のルーツなどをもっと国民学校の教育に入れろといっているんです。台湾のことを教えずに大陸のことばかり覚えさせるなんて、ばかげた教育でした。

司馬(注・司馬は司馬遼太郎 以下同じ)

こういう発言が台湾では、五年ほど前にはできなかった。台湾は新しい国になったんですね。

李 台湾語を話すこと自体が大変でした。私の息子の時代は、学校で台湾語をしゃべったら、日本統治時代に台湾語をしゃべると処分されたように処分されていました。中国語だけが許された。私はいま率先して台湾語を話すんです。もうそういうことをやらなくちゃ。選挙で演説に回ったときも全部台湾語でやったんです。

司馬 閩南語(台湾語)で?

李 そうよ。台湾の人々の聞きたいことを、たとえば雲林県に行けば、田舎ことばがある。その田舎の言葉で演説すると皆がピンとくる。中国語でいってごらんない、わかったものじゃない。それを台湾語でボンとやったら、これはわれわれのことを考えてくれる人だと思う。

司馬 英語は七〇パーセント以上フランス語が入っていますが、フランス語を多く使った詩は硬いそうです。ところが、イギリスの古来のことばだけで詩をつくと非常に人の心に訴える。

李 シェークスピアみたいだね。

司馬 日本の例をいえば、京都の第三高等学校の寮歌「紅萌ゆる」は大和ことばでつくられている。第一高等学校の「嗚呼玉杯に花うけて」は漢語でつくられている。どうも心に訴え、

残っているのは「紅萌ゆる」のほうだという人がある。台湾語は台湾の大和ことばですから、人の心に訴えるようですね。」

このように、司馬遼太郎との対談の中でも李登輝ははっきりと「台湾語」と「中国語」の違いを意識している。そもそも「中国語」の意味は非常に曖昧である。政治的観点から見れば、「中国人」の話すすべての言葉は中国語に属しているようである。中華人民共和国政府の見解では台湾は中華人民共和国の領土の一部と主張しているため、台湾語も中国語の方言の一つと見なしている。

これに対して、台湾は一つの新しい国であると主張している台湾独立派の見方としては、「台湾語」と「中国語」は別の国の言葉であるとしている。

李登輝総統の司馬遼太郎との対談には次のような発言がある。

李 いままでの台湾の権力を握ってきたのは、全部外来政権でした。最近私は平気でこういうことを言います。国民党にしても外来政権だよ。台湾人を治めにやってきただけの党だった。これを台湾人の国民党にしなければいけない。(注7)

この発言によって、李登輝総統は与党の国民党党内の外省人の元老と与党から離脱して中国統一を叫ぶ新党に激しく批判され、台湾独立の色彩に彩られている。中国人民共和国政府も李登輝総統が台湾を独立の国家にする意図を持っていると警戒している。

現在、大陸では、全国の共通語を「普通語」と称して、「北京語」や「中国語」や「国語」などと言わない。つまり、公の場合、または一般日常生活の場合、中華人民共和国国内の各民族の間で通用する言葉は「普通語」である。これに対して、台湾の国民政府は「北京語」を「国語」と定め、今でも「北京語」は官定の言語として使用されている。

普通、国民政府の教育を受けた台湾の人々は「国語」を話す一方、自分の母語(例えば、閩南語、客家語、原住民の言葉など)をも話す。

しかし、言語学の見地から見れば、台湾で使用されている「国語」は純粋な北京語ではない。単語や発音などの面において、台湾の「国語」である北京語は本場の北京語とかなり違う。

しかも、台湾を一つの新しい国にするために、北

を作って、祖先の骨を埋める。

- (3) 女性は野良仕事をするかたわら、家庭をよく管理する。男性は、安心して遠方に出稼ぎできる。
- (4) 貧乏に堪え、瘠せた土地にも定住して、農業生産ができる。
- (5) 客家人同士の団結心が強くて、村の自警団を組織し、外敵から自分の村を守る。^(注2)

李登輝の父親も母親も客家人の血統を引いているので、李登輝の性格は客家人の特色を持っていると思われる。司馬遼太郎の『台湾紀行』の中に、次の描写がある。

——花蓮のホテルで、家族旅行中の李登輝さんに再会した。食事の前、李登輝さんが例の旧制高校生の言葉で、開口早々にいった。「司馬さん、僕は客家なんだ」。^(注3) ——

この描写から見て、李登輝が客家人であることは事実である。彼は総統府の秘書長の呉伯雄（客家人）を通じて、自分が客家人であることを客家人に説明し、これから客家語を勉強するつもりだと述べて、客家人の団体の支持を得ようとしている。^(注4) しかし、公の場で自分が客家人であることを1回も言及していないし、客家語を話したこともない。

この「これから客家語を勉強するつもりだ」という表現は、裏返して言えば客家語ができないということになるであろう。李総統は客家人の血を引いていても、何故、公の場で自分が客家人であることを明言したがるかということ、恐らく、台湾の住民の多数を占める閩南人の支持率を配慮しているからだろう。

クリスチャンである彼の家庭の祈祷式も閩南語で行われており、客家語で行われたことは一度もない。李登輝総統の閩南語と北京語のテレビ演説は自分の声で録音したものであるが、客家語の場合は客家人の通訳に頼らなければならないという事実などから見ると、李登輝は客家人の血統を引いても客家語ができないと考えられる。

多分、李登輝の祖先が台湾に移民して来て、閩南人の多い台湾北部の淡水三芝地区に定住した時間が長いために、現地の閩南人と融合し、言葉の面も客家語を忘れ、閩南語を覚えるようになったのであろう。

実際、台湾に移民してきた客家人は一部分の地域

(例えば、桃園、新竹、苗栗、花蓮の鳳林、高雄の美濃など)を除いて、殆んど婚姻や就職のために閩南人に同化した。厳密に言えば、台湾の住民の中には、血統上純粋な客家人が多いが、言葉の上では、客家語を忘れ、閩南語を母語とする人がかなり多いと考えられる。李登輝もその中の一人と言えよう。

三、母語は閩南語

日本植民地時代、一部分の「国語家庭」を除いて、殆んど閩南人の家庭では、閩南語が使用されていた。皇民化運動が始まる前は、一般社会において、閩南語の使用が特に禁じられていなかったようである。

李登輝総統の父親李金龍は日本植民地時代、刑事を務めたことがあり、仕事の関係で住所が転々と変わった。そのために、李登輝も父親の勤務により3回小学校を転校した。^(注5) 小学校に入る前の李登輝は閩南語を母語としていた。

因みに、閩南語の閩は福建省の古代の地名の略称であり、閩南語は福建省南部の方言である。明、清の時代、福建省から大量の移民が台湾に集まり、それで現在、台湾住民の大部分は日常生活上閩南語を使用している。

戦後、台湾を治めに来た国民党政権の重要人物である蒋介石、蔣経国父子は大陸浙江省出身の外省人であり、浙江訛りの強い北京語は話せたが、閩南語は話せなかった。彼らのテレビやラジオなどの演説は一般の人々にはピンと来ない。説得力がないために、人々の心を打つことができなかった。

しかし李登輝総統は違う。外省人が多い場合、李登輝総統は北京語を使い、本島人が多い場合、閩南語を話す。つまり、聴衆の使用言語を配慮して、自分の話す言語を選択するわけである。彼は母語の閩南語を自由自在に操り、演説では、閩南語の俗語やことわざなどをよく引用し、台湾民衆の共感を呼ぶ。

例えば、1992年の元旦の祝辞では北京語の「飲水思源」(水を飲むときはその源を考える。つまり、もとを忘れてしまわないという意味である)を「吃菓子拜樹頭」(果物を食べる時、果樹の根っこを忘れぬという意味)などと台湾のことわざに巧妙に置き換えて、優れた話術の効果を収めた。

司馬遼太郎との対談の中で、李登輝総統も台湾語

李登輝總統の言語文化体験について

東呉大学日文系 副教授 莊 隆 福

一、はじめに

1988年1月13日、蔣経国總統の急逝で、李登輝副總統は憲法の規定により、司法院林洋港院長の監督のもとに總統に就任した。そして、従来、あまり知られていなかった李登輝總統の生い立ちが急に脚光を浴び始めた。

これまでの大陸出身の「中華民國」總統と違って、大陸の経験を持っていない李登輝は、正真正銘の台湾本土出身の總統であって、22歳まで日本の教育を受け、日本語を話し、日本の国籍を持っていた、ユニークな政治家である。彼の台湾民主化に対する影響や政治改革の功罪などについては論争が多いけれども、本論は李登輝の言語文化の体験について探求しようと考えている。

二、出身

祖先は客家人だったが、
李登輝總統は客家語ができない

1923年(大正12年)1月15日、李登輝は台湾台北県三芝郷埔坪村埔頭坑151号の源興居に生まれた。父は李金龍、母は江錦である。李登輝の家系図によると、祖先は福建省永定県湖坑郷奥杏樓下村の客家(ハッカ)人である。

因みに福建永定の客家人の中に3人の国家元首が現れた。つまりシンガポールのリー・クワン・ユー(李光耀)、そしてフィリッピンのアキノと台湾の李登輝である。しかも、リー・クワン・ユーと李登輝は同じ系譜に属しているという。^(注1)

「台湾永定同郷会」の李氏宗族の提供した系譜から見ると、李登輝一族が台湾海峡を渡って台湾北部に定住したのは14代の李崇文と李嵩文の時である。彼らは閩西(福建省西部)の客家人であった。

客家人はもともと華北あたりに住んでいた漢民族であって、戦乱のために華南に移り、現地の人々とあまり融合せずに、長い歴史の流れの中に、いつまでも祖先の風俗習慣と文化、言語を守っている。「客家」という言葉には「外地から来た人」「よそもの」「異郷人」などのニュアンスが含まれている。

客家語は中国古代の言語の一つであって、黄河流域の重要言語だった。歴史上、客家人の5回(秦、東晉・唐の末期、南宋、明の末期)の移動により、客家語の分布の範囲も広がった。今日、客家人の居住地域は江西、福建、広東、広西、湖南、四川、安徽、山西、陝西、海南島、台湾などで人口約六千万人ある。各地の客家語は訛りが多少違ってても、意味伝達においてはあまり差し支えない。

客家人は戦乱を逃れるため、転々と各地に集団移動したので、精神上いつも被害意識が強い。政治の圧迫に対する反抗心が盛んである故に、革命家や政治家が輩出しており、元の時代の文天祥、太平天国の洪秀全、近代の孫文、現代の鄧小平、リー・クワン・ユーと李登輝などが有名な例である。

李登輝の母親江錦の祖先も福建省永定県から移民して台湾北部に定住した客家人であるために、李登輝の性格を研究する場合、客家人の性格の要素を抜きにして語れないと思う。客家人の性格について松本一男は次のように述べている。

- (1) 努力し苦勞に堪える
- (2) 堅い意志を持つ
- (3) 勤勉な態度を取る
- (4) 団結心をもって外敵に向かう

なお、客家人の風俗習慣としてよく知られているのは次のようなものである。

- (1) 仕事しやすい目的と、戦乱から逃れやすい目的で、婦女は纏足しない。
- (2) 祖先の骨壺を背負って、旅して、定住の村に墓